

次は調査報告——。

長崎の人は Georg Indemann の名字を「早業活版師ゲ・インドマウル」とか「インドマウル」と呼んだ。インデルマウルは、わが国では単にオランダ印刷術を日本人に伝授した人として知られている。が、実はかれは第二次海軍派遣隊の看護兵でもあった。

「軍籍簿」によれば、一八三一年(天保二)九月二日、ユトレヒトに生まれた。歿年は不詳。一八五〇年四月二十七日——二等砲兵に任じられ、翌一八五一年八月十五日にいったん除隊。

一八五七年(安政四)二月六日——ロツテルダムにおいて三年契約で「看護兵」Naken oppasser として雇われ、ヤパン号に派遣された。バタバアまでカッテンディーケラ海軍派遣隊に同行したが、一行より一足おくれて来朝。

一八五七年(安政四)十一月一日から一八五九年(安政六)十二月一日まで日本に滞在した。記録にはただ「日本人に教えるために出島に滞在した」とある。長崎がコレラに襲われたとき、その撲滅に尽したが、ポンペはその功績をたたえ「かれが一層仕事に精を出すよう、またその功勞に対するほうびとして功勞賜金を出して下さるようお願いいたします」(一八五九年七月十日付、ドンケル・クルチウス宛書簡)と述べている。離日後、蘭領東インドに赴く。一八六〇年(万延元年)四月十五日——除隊。この年二十九歳。その後、どこで何をやり、どう暮らしたかについてはわからない。

長崎養生所の設計者トロイエン、ポンペ終えんの地に関して

は、またの機会にゆずります。

尾本涼海について

田崎 哲郎

尾本涼海について最初に記述したのは、長与専齋だった。『松香私志』(明治三五年、長与弥吉刊)に、適塾から長崎へ来た折、尾本宅に寄寓して、そこからポンペの講義を聞きに通った旨記している。同書附録の「旧大村藩種痘の話」では、嘉永二年(一八四九)モーニッケの牛痘種痘成功の報が大村につくと、尾本は専齋の妹等連れ、長崎へ向ったことが書いてある。

次に尾本に言及したのは山路弥吉(愛山)編『台山公事蹟』(大正九年、田川誠作刊)だった。大村藩主大村純瀨と尾本の関係に触れ、七頁余りの尾本の談話筆記も収めてある。ついで深川農堂『大村藩の医学』(昭和五年、同出版会)は、山路の著に加うるに尾本家を継いだ尾本安次郎の談話や当時まだ残っていた史料によって、尾本に一項を立てて記している。尾本は私の居住する豊橋の出であり、現存する若干の履歴なども参考に経歴を略述したい。

尾本家の医の初め、涼海の祖父喬(玄格)は三河国幡豆郡平坂(現西尾市)の郷土の子で、医を学び、後吉田(豊橋)で開業した。涼海はその孫で、公同ともいった。文政四年(一八二二)八月の生れである。

「天保七年(一八三六)丙申三月三河國田原藩鈴木春山ニ從テ始テ西洋醫學ヲ學フ」三年、同十年己亥東都ニ遊學シ、大槻俊

齋、坪井信道ヲ師トシ内外醫法を學フ。四年、弘化二年（一八四五）乙巳ノ春ヨリ京攝ノ間ニ偏歷シ、當時ノ諸名家ヲ問ヒ、學フ所ヲ質問シ、且之ヲ實地ニ試験ス（自記履歷）と記している。天保十年五月に、蚕社の獄が起るが、四月に春山が出府したのに同行したのだろうか。蚕社の獄は江戸で実見したことであろう。京撰を廻った尾本は長崎に足を延し、写真師上野彦馬の停車場の客となった。嘉永元年（一八四八）正月大村の村田徹斎を訪ね、ついで古田の長与俊達の種痘山に移っている。長崎に痘種を取りに行くのはその関係からであった。嘉永三年大村藩への永住を許され、同五年には藩医となり、六年には侍医となり、五人扶持を与えられた。藩への登用は医者としてと同時に春山以来の西洋兵学の知識の利用の観点もあったようで、しばしば藩主の下間に預り、西洋式銃隊の操練も行っている。

安政元年（一八五四）九月蘭学修業の名目で、渡辺範助（後の男爵清）等七名を連れて長崎に出、五島町に居住した。これはオランダ人に接する機会を得、西洋兵学の知識を得ようとするものだったが、目的は達し得なかったようだ。安政三年五月塾生は大村に帰し、尾本は銀座町で医を開業する。これも目的は西洋の情報を集めることであつた。長崎奉行の医療の相談に預つたのはこの頃である。なお、ポンペに一時ついたともいわれる。文久元年（一八六一）九月には、長崎奉行岡部駿河守の依頼で、威臨丸で江戸まで同行している。

文久二年、幕府が千歳丸を上海に派遣した時、尾本は医師として上船している。四月二九日長崎を出港、五月六日上海着、七月

一五日長崎に帰るまで一行の世話に当っている。上海では特に暑さと水の不良のため病人が続出、看護に追われている。同船していた高杉晋作、中牟田倉之助等の上海についての記述、なかでも太平天国の乱の最中の同地の植民地化の状況についての認識はよく知られているが、尾本にはそのような記録は見出せない。

翌年居宅の作事にかかり、元治元年（一八六四）六月に完成している。その地は涼海島と呼ばれたという。

維新後長崎県医学校にはいりなおしており、明治四年三月の通学生の中に尾本の名がある。その時の校長は長与専斎だった。同年九月尾本は藩主に従つて東京へ出、その侍医を続けながら、開拓使に出仕したり、東京府病院に関係したりしている。明治五年には虎列拉病流行の検疫に従事したことにより手当金十五円を与えられている。明治三〇年二月一九日、七七歳で亡くなっている。墓は青山墓地にある。

筆者は在村の蘭方医の検討を行っているが、尾本は地方から出て、その得た知識技術によって新たな道を見出していった、出世移動型とでもいうべきタイプに属するといえよう。そのような例がいろいろ発掘されることにより、多様な蘭学徒の様相が明らかになってくるかと思う。